



はじめに

難波宮跡は中央区法円坂を中心に広がる飛鳥～奈良時代の宮殿跡です（図1）。昭和29（1954）年から始まった発掘調査によって、中軸線を共有して重なったかたちで、2時期の宮殿が存在したことが明らかにされています。

古い方の宮殿を前期難波宮と呼び、造営時の整地層に含まれる土器の年代などから、7世紀中頃のものと考えられています。皇極天皇4（645）年に蘇我本宗家が滅亡した「乙巳の変」の後、孝徳天皇が擁立され、難波への遷都が行われたのを契機に造営された「難波長柄豊碕宮」と推定されています。広範囲に認められる火災の痕跡は、天武天皇の朱鳥元年（686）に宮殿が全焼したという『日本書紀』の記載と一致します。

一方、新しい方の後期難波宮は、大極殿などの主要建物に使用された瓦の年代から、奈良時代の神亀3（726）年に聖武天皇の命により造営が始まった宮殿です。近年の朝堂院東方における調査では、これまで知られていなかった基壇をもつ建物の存在などがわかってきました。

調査の概要

今回の発掘調査は、難波宮朝堂院の西方に当たる国立病院機構大阪医療センター敷地西南部の約1,900㎡を対象に実施しています（図2）。このうち西端の調査区において、難波宮期の4棟の建物（建物1～4）、東西の堀1および南北の堀2が見つかりました（図3）。

堀1は長さ約41mを確認し、それ以上の長さがあったと推定されますが、東端は南東から延びてくる谷（図2・3）の手前で終わり、おそらくは南へ曲がって、役所の施設を区画するものであったと推定されます。また、堀1のうち西側の柱穴5個分は、東側の柱穴に比べて柱が太く、また、柱の間隔が狭いという特徴があります（写真①②）。この部分は東側の堀とは異なる設計の堀か門のような構造の建物があった可能性が考えられます。

堀1の南には南北の堀2を挟んで西に小型の建物3、東に桁行6間で東西棟の建物4があります。建物3は堀2に近く他の柱穴に壊されていることから、堀とは同時期でない可能性があります。さらに、堀1の北には建物1・2が南北に並んで見つかり、建物2は柱穴の配置から床貼りの建物であったと推定されます。

これらの時期は、柱穴から出土した遺物に奈良時代のものがないこと、堀1の柱穴の形状（写真①）が前期難波宮内裏西方官衙の堀に類似していることや、堀で区切られた空間に規則的に建物が配置されている点が前期難波宮東方官衙に類似しているといった理由から、前期難波宮の時

期と推定されます。また、調査区東部にある谷を埋める厚い整地層（写真③）からは7世紀中葉以前の多数の土器や、人形や斎串、鏃形・琴柱形などの木製祭祀具（写真④）や馬牛と思われる獣骨などが出土しています。この付近を前期難波宮の役所の建設地として利用するために埋め立て、整地された可能性が高いと考えられます。

今回の成果の重要性

前期難波宮は、内裏西方に位置する大阪歴史博物館・NHK大阪放送局の敷地西側で検出された南北堀跡SA303が宮殿の西限と考えられていました。今回の調査地点はSA303の南延長線から西に約100mの位置に当たり、大阪医療センター西部から銅座公園にかけての台地高所にも難波宮の役所が存在したことになります。

大阪医療センターの敷地内では、これまでも20回以上の調査を行ってきましたが、後世に遺構が破壊されていた事例が多かったことから、難波宮西南部における宮殿構造の実態は明らかではありませんでした。

今回の建物跡や堀跡が前期難波宮のものとするれば、宮殿の範囲がさらに西へ広がっていた可能性が考えられます。もうひとつの解釈は、宮殿の外側にも堀で囲まれた役所などが設けられていた、という考えです。いずれにせよ、律令政治が本格的に行われた藤原宮より前に造られた前期難波宮においても、広範囲に役所等の施設が造営されていたことを今回の成果は示しており、日本の古代国家の形成過程をうかがう上で重要な手がかりとなります。

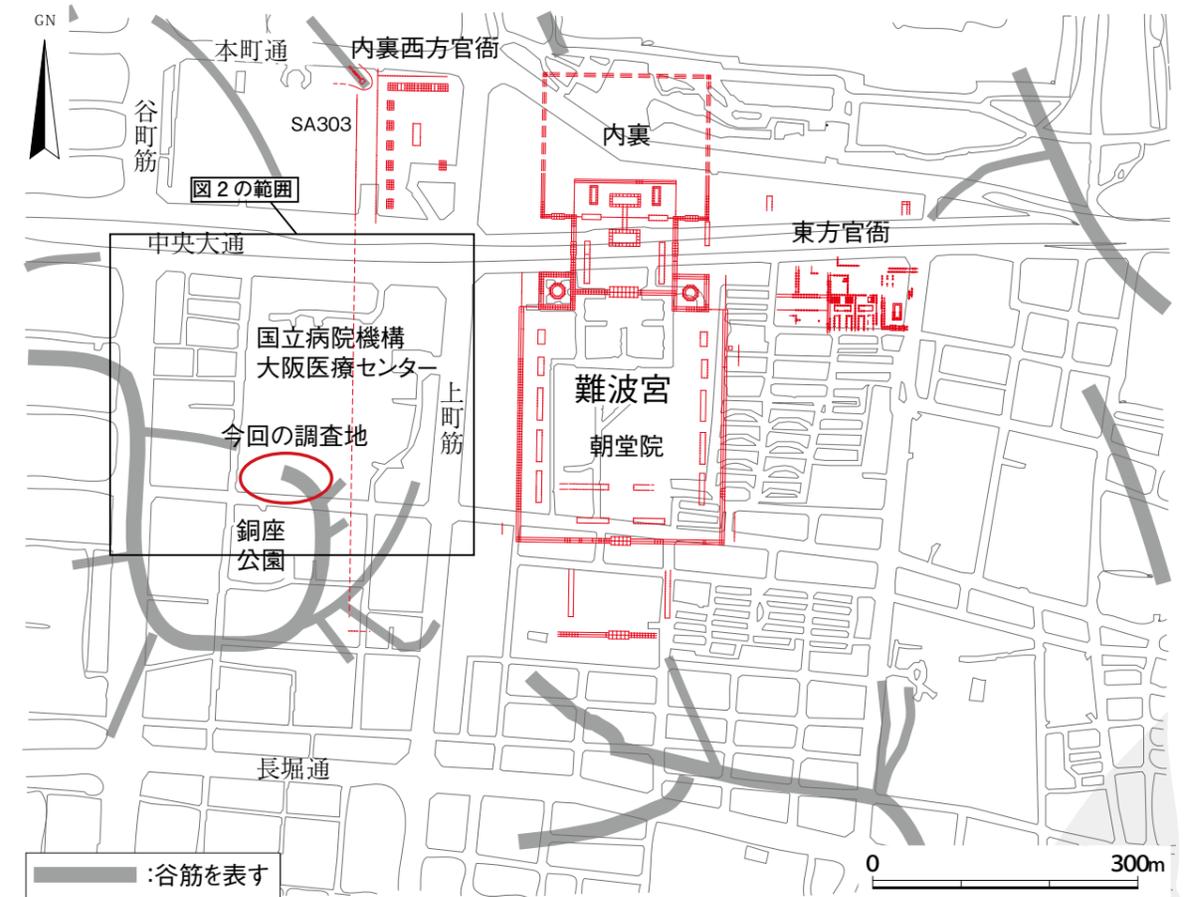


図1 前期難波宮と今回の調査地

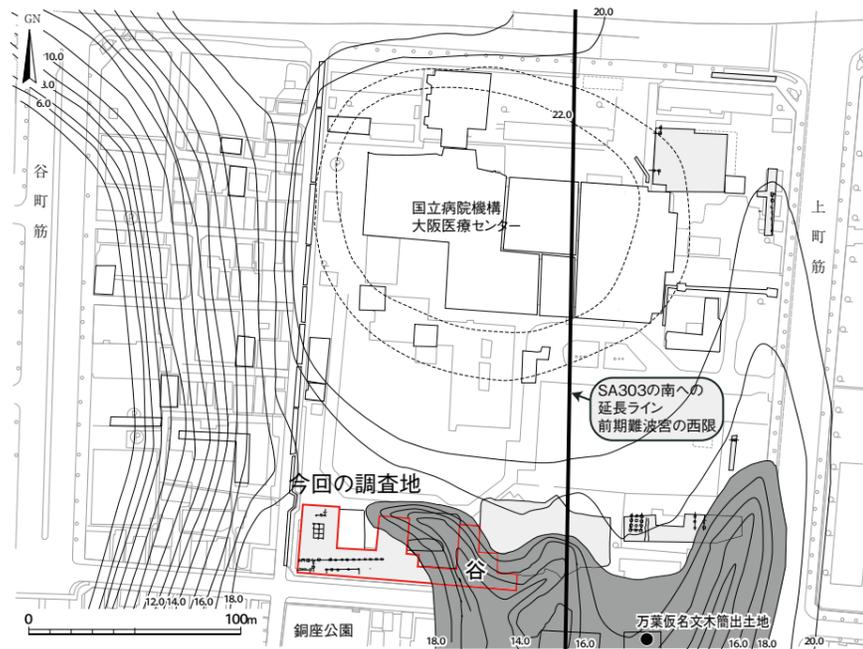


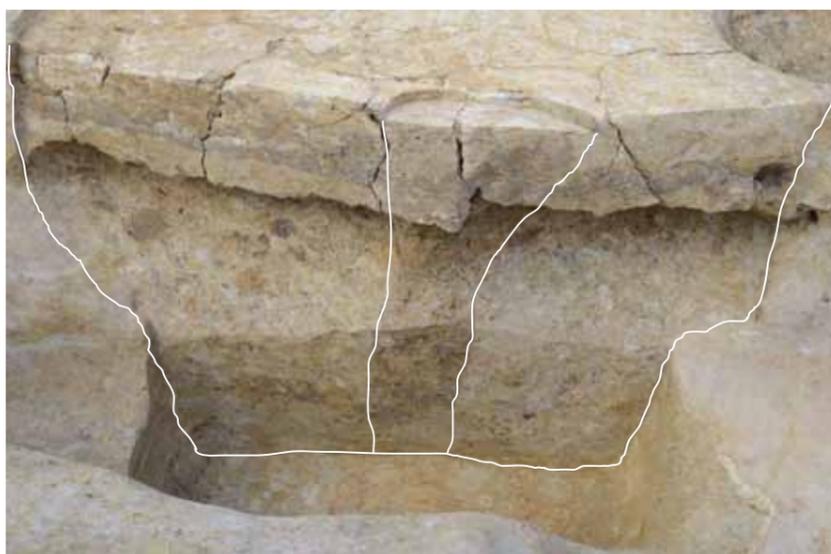
図2 周辺地形と今回の調査地



写真④ 整地層直下で出土した木製祭祀具など



写真③ 谷が埋まった様子



写真① 塀の柱穴は段掘りになっていました



写真② 東側の小型の柱穴

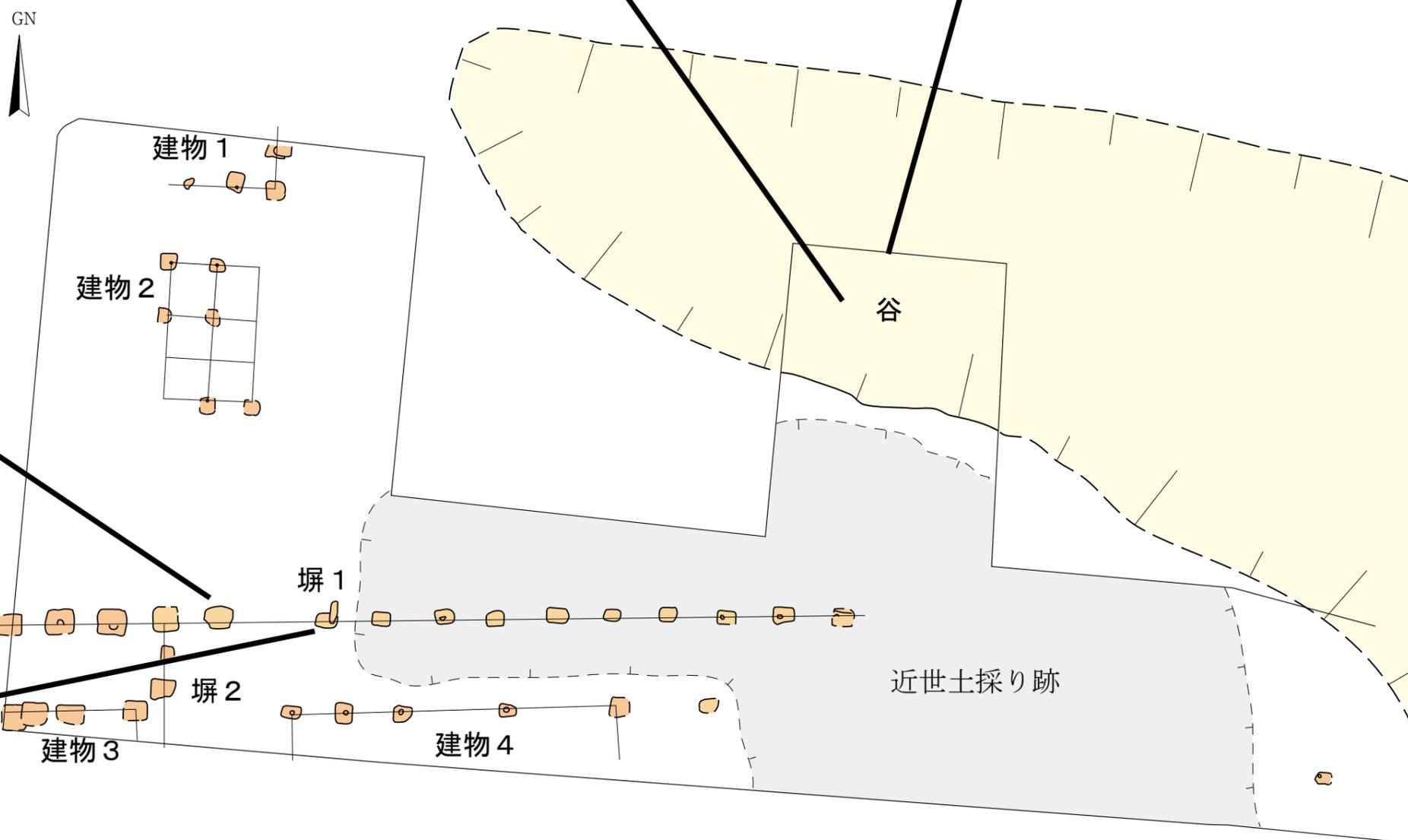


図4 古代の建物・塀の配置全体図

0 5 10m